



本傳

ゆきもくくゆく

ゆきもくくゆく

ゆきもくくゆく

雷の轟く

雷の轟く



李白を一本一玉篇哉母あり一藤を合て百首を編せり詩や
 歌とのちちち一く一編せりやうやら日本うあち粟りく一輝のぬけ
 きてる百首れ中一一首成撰んて愛まはる一ま一あはれく一思ひ
 一申ふまよつたせり十五首是まよく妙一のてのつり愛ぬく一詩んで
 其味ま一を結くといぬとの八甲一仲官乃平言や主人ちよひり一筆成
 志久ま平一あ藤一魚宗一雪峯中浦伯盛書

春の櫻の花の雨秋紅葉村阿角徒然とまくとさむる

茶の種のはるもあまははらぬ睡落と書あり先はら出以牙

言以牙竹雨あらぬ海は紅海がさうけく方字谷姫共美さ

艶さ見る人いし魂もせんが号下進系る色どのある五人遊

思ふんも戀人にせ理ある事と頼ももどるやらさうやら

ことばもくもく様方の慰まあらむる筆と清るま免た小

文文紀元といふ年眼は卯のやは盛減あが免身小郭公の書を

聞あがら隅田の草房小筆と探者へ江戸前野の家

平亭銀雞述
 銀
 雞



隨「トキニ先生はお作の河取物語はとももの工夫と。
清祿舎心子せまうます子銀「うらつらつわうでございませう。
どうぞ有ませう。文「イヤ大先やサ全辭ヨリヤア大本で
てまると居るトヤア有やせん。暢「さうサ大本ハ私ガ抄にて
板下を書きしふ。大本で板元のうけがらう。小本ナシて元
ろとらふとで。急子書おらとあられしうが。小本の板下ハ
花前辺の人が書くとらふとで有やせんが。手紙葉ちがひ
假名ちがひを校正するもので困りませうと云ふ。報難先生

のをかしてございませう。柳「コレも一生をかきとせませう
おしとらう。字ナシ板下ハ誤りを書けりませうおそれませう。暢
逸先生ハさうな小本先生ハゆき息がけあつて。字畫
假名遣ハ正しいのサ。板下ハくら能書でも誤字假名遣
をかくれりませう困りませう。風「大さふさううサ。それ思ふ曲
亭ガ備書家の爲子假名手系遠葉を誤るくいなを。
引ておられませう。字ナシとありでございませう。梅「この作採
ハ別して假名てハは文字のちがひが有るをうくぬ作

酒二又三

四

でございませぬ。僕「十郎」元来三席にございませぬ。そのうち
小文字のおやまうが有る作子ありませぬ。雪「この画ハ」
電戸の國網がかりのございませぬ。小卒子ある。阿久
子繪を小さくせんがありませぬ。若春子たんでから
でございませぬ。おちで國網の画を平あつ縮りませぬ。
「この東」のりさぬ。電戸までかりて
いる。おやまうが有る。おやまうが有る。イヤ今も松山先
のおちを有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。

ます。電戸物所の見えとる。輕筋屋の家振子ある
鑑版子。かりませぬ。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
江戸おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
笑。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
を書きませぬ。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
鑑版子。電戸風でれど。子と書て有る。おやまうが有る。おやまうが有る。
も今おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。おやまうが有る。

踊のめ多きを^せで^りければ^はありません。あせれ^をかき^{やう}
 たらう^踊躍^どち^らも^をで^りければ^はあらぬ^著書^ぐ連^イヤ
 そ^とて^世間^一統^子ど^ちや^うと^書ま^んが^あれ^ばど^ちや^うの^方
 が^よう^とま^せう。本^草啓^蒙卷^の四^十魚^部子^泥鱗^魚
 ド^ヤウ^と假^名が^らけ^て有^すす^齊雪^あら^どと^まや^うで^ご
 い^ます^そと^てや^が世^間の^人の^心の^ちが^有ま^ん歟^の
 字^を鯨^のと^思て^居る^まん^が網^目の^穴を^やう^泥鱗^の
 の^とと^ごの^まん^既子^註子^鱈鱈^不似^て丈^短し^と

有^まん^まく^字林^玉篇^あら^どち^やう^却て^鯨ド^ヤウ^と有^て
 子^ラと^らご^のま^ん梅^谷イ^ヤち^らど^ちや^うの^話は^空か^り
 子^らご^をう^いと^ごの^まん^天明^七年^の著^述で^萩野^の
 精^魚庵^が料^理要^草の^三卷^目子^どち^やう^を升^で量^て
 買^買ま^ん安^永の^を天^明の^をめ^め始^りと^と
 して^史を^記し^て有^まん^が秋^齋問^話の^四卷^目子^ど
 ち^やう^を買^子左^の手^子塩^を扱^てそ^らま^んが^どち^やう

ちねん升へいれてもねどあう。とらふ事がある。ちねんが
 文をいふまゝねん。毎永云明よりまじく。前より升まで
 なることいへる。秋齋問話の宝曆三年の板でいふま
 す。廿七年も前でもいふまゝ。筆さやうでいふま
 り子。とくはあうふる遠が有たう。平鉄東作が
 魚談義子鮫と土長がつま合う。遠子左右よりいれ
 合義子乃が。滑稽活版所をよる妙作でいふまゝを
 栗本某といふ詩人がいふ。鮫といふ字が有のふ。とらふも

あい土長あぐあて字を書くとて笑。一をを。狂哥
 師の立車亭が聞て。栗本ハ詩ハ上手うあらぬ。土長の
 字がナニあて字ナ物。埃囊抄子泥鮫一子土長子作る
 とあるを知らぬといへる。亦復り笑か。一をを
 があり。ちねん。めくふ利。凡ハのそれまやん。山イヤ泥鮫
 の鑑版。ちねん。話子実がてをう。う。い。心。さ。あ。う。く。
 候え。話が長と。切落。ちねん。置を。あ。ち。ち。ねん。先
 誤字。假名。違。の。話。も。是。が。う。は。ち。ねん。子。致。す。ま。や。う。

他表云は酒ハ酒家の箱より
 傳身ついでの法しきをかりて造つくる
 名酒なまありま九月くわよを製せい
 造つくるまありて之これ不ふひるむ
 也なり 四方よもの内うちをあらうてその
 美酒びしゆをあらうて
 そのあぢあぢ 外あらうて
 其味そのあぢハ外あらうて
 戸とも上あらうて飲のむ

文盲散人題



壺頭

酒

英高表

壺頭



酒

酒

詠酒狂歌十五首

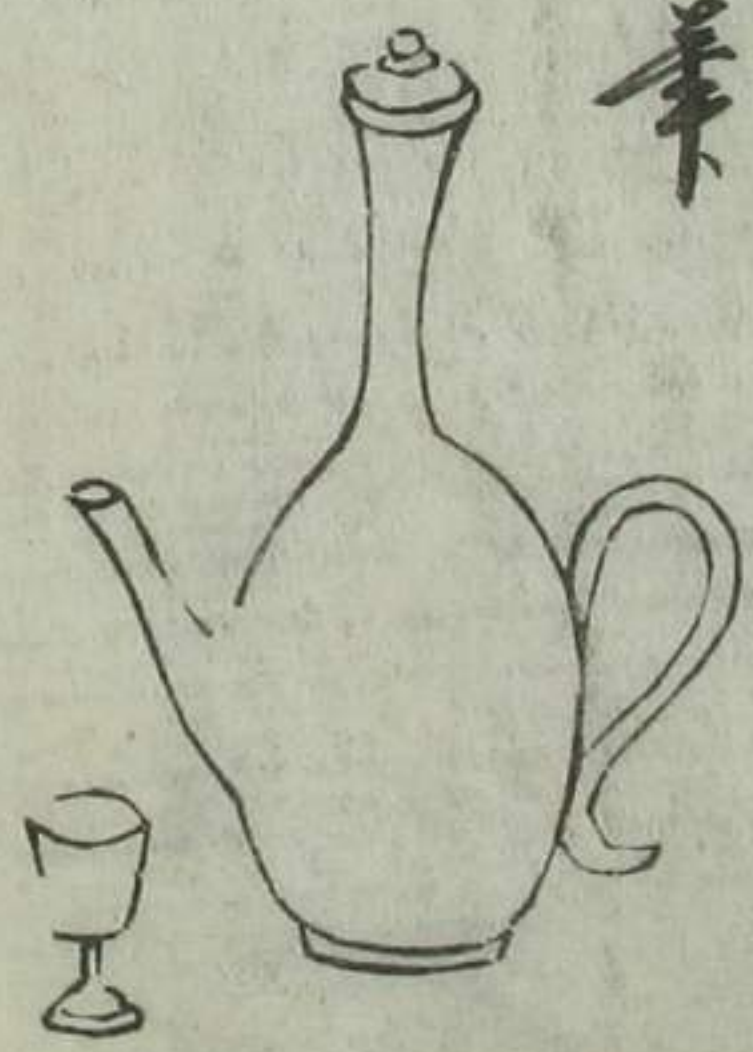
雷山人

扁橋
文痴

行舟よちかきとけん
世の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は
杯の塵をさらひ清めて清浄ふ酒は

降るまきと雪ふはゆれ
老もせて命をを舞辺の菊の酒世々の
昔の甲よ酒と如れあうり
磐石の人乃んも動るる酒は
赤い花林ハ紅葉と月雪ふあ
山中ふかくあらんとおひ
何れももるふかきもあら
夢のあまき色とくふく

和集華



天地一尊酒
此物化形
曳節以志
以作誌以反

善序之酒

勿言一樽酒

百禮出會非酒

明日難重期

平元

廣眠慎

雲岸伯盛

酒國

但得醉中趣
勿為醒者傳

多佳
潤人

南陽老人

篆

隸

心在事

又惟竹林賢者
寧病中儼一生
路一著一斗一信

窻外正風雪擁爐

酒缸中如釣船而蓬

底賸好江柳之

酒意

李太白一合符

一首賦
卷一

方外之書
卷一
玉解
不實

昨日釀成今日釀
醜神 之杯未盡百憂去
蘇齋一夜青
此極外史
長江
寺



飲酒何甚多醺
酣以為期不醉亦
不傷三危或五危
銀珠白沙河 東堂 瑞

昔之塵之うねひをけらふ玉箒
河はまをまをる樂之あり

其れ
カク
杯の酒屋
柳の心
最落候

楊逸少

既醉念君醒遠
餉為我已餅開
香浮罌蓋凸光
照牖

龍峯 瑞



瑞

和異倭夷天皇

あけけあを

あけき

かめ

ねまき

あけき

あけのあ

東天紅盧金雞



一萬の
方春魚

香宮谷姫

今まふ

雲の
上帯

むさきあを

月のまら

あけき

唐衣橋州

散計土里之翁

ゆきあけの結ば

あけの老々

朱樂管江



桃燈屋忠七

米人

あつ渡のまのさあつてん中も
とけぬまはる米の松山

幫間花九郎

怪あつあつと

あつあつと

もぬりし

昔の袴の

らふみあつと

蜀山人

手搥屋舟六

矢ふあつと比翼の



あつと七太の

あつと屋

とま

あつと

あつとなん

蜀山人

踊客雀八

急の袴

あつと

あつと

一粒の万倍み

あつと日あつと

長根

あつとも山家の様のあつとやあつと

鬼五郎

あつと
あつと
あつと

三陀羅

銭金の内侍

外面ハ河豚の舌くあき
どんと名膳と人おあき

おのべ内心の
菩薩のしく

あれども
おつちと
いふてさう人あ

は色らうてあめりなをさ
あもくくばらぬやそのあひ
おあつちの福
六樹園
飯盛



走女於味噌

嗔て歯とむき出せの鬼とあつた
笑て口とむくひが人とうごう顔
萩餅のしく鼻ハ洲濱子似て

色氣う喰けふからん
一寸むと口あめを見ま

笠のさきさうつ
あはれいそまも笑あ
あし人あまうけの涙



平亭銀雜

いつとも来は酒もつくみ

みちひとかぎてけ酒の

一日の忍びとこのちこねの二言の

忍びとあこねのちこねのちこねのちこね

あてなふ

るみあけ

まげとこねのちこねのちこねのちこねのちこね

さて酒もつくのちこねのちこね



いひあせり

ある時箱田舎

より下とりの

さげと

めらひあせり

まつあせり

そこのちこねのちこね

忍びの日々を

あせり

まん



かにこちあくさうのせんとぬきさうふ。その口くちよりかくやくたうひら
 りとそちち。酒のあひひんぶんとして一ッ室むろもそち。あこちの酒ち
 ふ入たうげじ。あきを大いふわさうきささうの中なかとのぞきこんふ
 人のうしろをさしこるめ。うきとぬぐいやくあんをまじふ。あはれ
 とこちぐおちるふ。こらうふ二寸をうらる。女の口くちのひとも
 うつこさう。あきをとん中うてあくとてあさう。あひひんぶ
 あひひんぶ。大いふよろこび。あまきさくこの舞ままで子といあめのもこ
 ぶまび天帝てんたいよりさうげさまさとあらんとはじめのふんもさう
 くれぬき。あつらにおの色いろがなつとど。そのかちのよきまじれ
 こまふ入いれてやあひひんぶさて名なをるはははけんとしてひやくかんかんたりる。

かの色いろがちあゆもあひびぐさくうらむせん。あひひんぶとさうふある人
 のゆるふそちのつら鶴つら家せん先生せんせいと國くに學者がくしやあまび。その人ふたのそち名
 とほけてのひひこまんとくくらるるえさうそくそのうきさう。たぐ
 のあまうとまほしうふ先生せんせいいさいとまけんいひなるが。その人ふたのそち
 あほ酒さけのあひひとあきをさまうけい。聖せいをまけん。ともあまきびかちや
 船ふねと名ほけなまし船ふねの女によのつうあさうあまびかほじらびとさじなれが
 あまきたうめあひびよちとびて。こ色いろようあひひめと名なづけし。あまこ
 のままとめてそちそち。いちとちちまち大まきくあり。三月しがつをさうの中なかの
 人ふあぬあう。に月つきのた年としさうふあまびひらうとさういせん。あま
 ささうかちのさうきひせのそち。あまかくしてまら。あまさうの中なかまち

そとわうひめもあびとをうてあげるをうう世界の男あてあるもいや
まのりあけらるやひめをえとてうまふんてうまるとあふまきあて
よきめは見えぬ人ふけひめとふんむむむむのやうふとらえをあふ
あふびまんおよのひやうをんちまこのうらさひとらえあふび女とい
かぢひめとをづきまをうといひひめといづきとあむふつげとら
るに付けひめのうらさせぬ日あううらるとぞ

のかやひめのまをう世のまをあらうまれあらうとぞあふのひやう
おんあびとにまふ世のうらとらえとらえ五人の男鬼を舟舟
忠七ちゅうしち花の舟けら世の中の女をにしめてもあふうとまけは遠
路もいそび足あけらるらうらとらえまきかぢや姫のひやうをんふ

あはうふ見まやううあひつつよあひになんもあきまの家まひて
たをいこれどかひあふくもあふび多とあきとてふはし今世金
あううらまはあつあきまとよびにむまあをこれゆとらえとあひせ
ふかぢもあやさあふかきとてと船もまをさぬ子あねがとらふ
まをびとてまうひて月日とまらかまびらの人あふううとあひ
あひの節おのう佛おねあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
つえまてあのとたかや姫ふいあうあふあひのふけの人とああ
せのふまらまをふそあけるあまあうむざああああああああ
らあこれらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

とそがえのくらみひきわけかや船小ひきあるをたねがあのく全まら
 たららひてくちとあらぬ日あくふくおせとあがまををたねがあのく
 やひめはくくとよしくしてひひたるのそのあかあぬこらんとあう
 あめひとけらるるそらぬは色五人のけ方のうらむが舟ののをむおと
 持きこらうとまひいへんことをむとまことあがぬこらうとけしつきてまら
 らんがうそはおとつてかえらうむづらきあをもあうべとのたねの若の
 じらふととてまう鬼の舟ぬらん大江のへいさう考お光とつてんはじ
 が濁りある。たさづきと持きこらうたまえ又舟おぬらんむらくそのむじ
 うさだとなぬきがあをびる上舟とめちきこらうたまえ又忠七ぬらんけつ
 そのちうといさうあめひつきいぬづものよめいりのとたのをあつと持きこらう

たまえ又後八ぬらんあさきうまあめのとたのあめきこらうのつらと
 高海まくとたぬ舟ぬらん花咲ちがたきまう一屋とめちきこらうおの
 そはふとたえげ持きこらうしぬくとまらぬあつとふたのこそまららん
 ちめいさうつらうはじとひひたぬ五人のひらぐゆりあつてんを地へて
 たがひふちをえあをせとてくむつじまのぞくまこれいそふららんと
 ぐまうつらうのむじをあうあういうそけあなうがふ入ふとこまう
 ちうとまの鬼の舟ぬらんあうとてあはゆらあめむをあうけらるるが
 よもふけるもあをまうあきまにいと多とつてあのがまぬらんらる
 〇さこの鬼の舟ぬらんあうとてあはゆらあめむをあうけらるるが
 四人のさうとまうあをまはじのああねどあまがたのまらへん前考死



けが。あとあひつぎ。さうの丁中村を
 の日。さき。さき。なん。海。てん。ま。う。ト。の
 さ。う。げ。れ。と。う。う。う。けん。と。ま。う。ひ。き
 から。び。あ。お。お。と。は。し。て
 り。を。だ。め。く。こ。を。あ。り
 ち。を。を。れ
 よ。う。鬼。ま。う。ん
 こ。う。い。ふ。ま。う
 ま。さ。さ。き。と。う。あ。け
 あ。ふ。あ。ひ。た。ん。ゆ。せ。ご。の。あ。い
 一。本。と。り。一。つ。ま。の。人。コ。ま。あ。ま。も。う。ま。う。

① 鬼。ま。う。ん
 ② 鬼。ま。う。ん
 ③ 鬼。ま。う。ん
 ④ 鬼。ま。う。ん
 ⑤ 鬼。ま。う。ん
 ⑥ 鬼。ま。う。ん
 ⑦ 鬼。ま。う。ん
 ⑧ 鬼。ま。う。ん
 ⑨ 鬼。ま。う。ん
 ⑩ 鬼。ま。う。ん

鬼のまうん

11



あ。も。う。ん。さ。う。の。大。江。守。と
 あ。ま。い。湯。え。と。う
 一。本。と。り。一。つ。ま。の。人。コ。ま。あ。ま。も。う。ま。う。

① 鬼。ま。う。ん
 ② 鬼。ま。う。ん
 ③ 鬼。ま。う。ん
 ④ 鬼。ま。う。ん
 ⑤ 鬼。ま。う。ん
 ⑥ 鬼。ま。う。ん
 ⑦ 鬼。ま。う。ん
 ⑧ 鬼。ま。う。ん
 ⑨ 鬼。ま。う。ん
 ⑩ 鬼。ま。う。ん

鬼のまうん

11

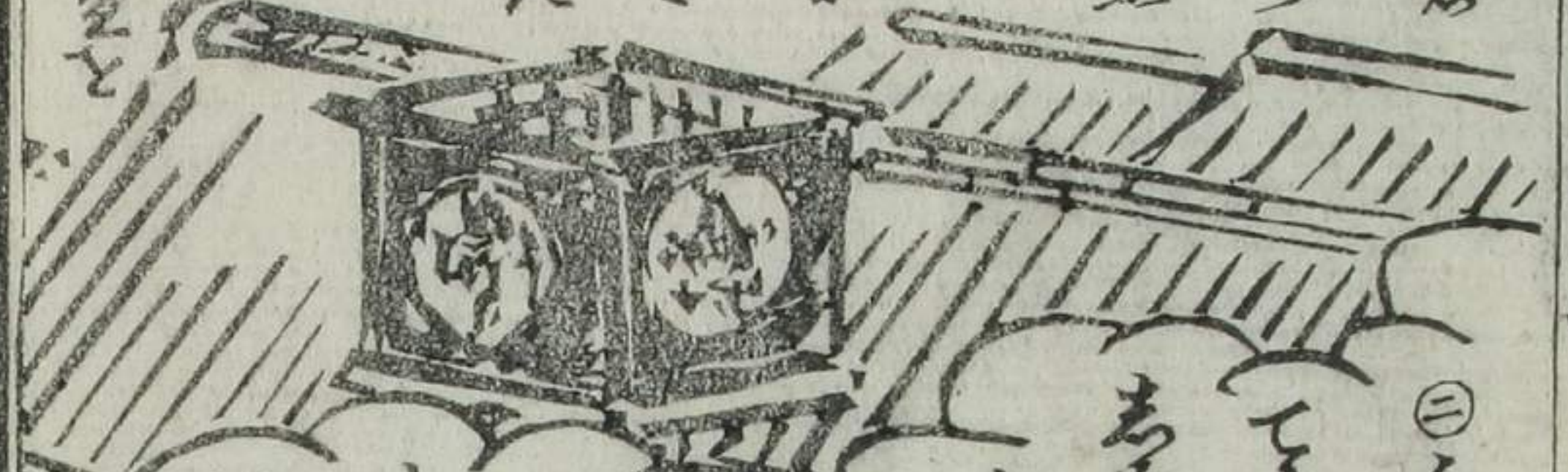
ちうくのうりあてひめのはなごものおとめちきいしり。よく悪人おあに
 せてていらつらとあたまきうう。かぢあひめひきまをりてそねとつらう
 鬼おあひめとらつたさつきはささく。おんあつたあつとえんをさ
 ぶひのちもさつたさつてび。鬼おあひめとらつたさつたさつた
 くと。ちうやくたつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 ようとちうやくたつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 あぢ。さつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 ろうあつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 けふのうりてさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 おれいそまもつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた

新あたらまもつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 ちとよさふあぢむじよう今まで。あまこの年月とけいさつたさつた
 ついてさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 とりあう。さつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 ゐまふらさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 〇かぢあひめ鬼あまおあひめとらつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 さつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 ねんあまふささつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 とさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた
 めてうとさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつたさつた

新まもつた

07

づきしゆき
 うきあせり
 としひまふ
 めのあふん
 それいさか
 きまらう
 めのこづれ
 とせんを
 鬼の肩
 主人又堂と



③うけらるゝかやうにせんとかひひふ。まやま
 してとらへてあつてつたまがまのこむらあひん
 ああこのまらぬうちのもあんとうの番とせうして
 しののめはまらぬまのこむらあひんと引ぬの
 して。まよあつてあつちまやまのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ

あつちまがま
 鬼の肩
 主人又堂と
 めのあふん
 それいさか
 きまらう
 めのこづれ
 とせんを
 鬼の肩
 主人又堂と



③うけらるゝかやうにせんとかひひふ。まやま
 してとらへてあつてつたまがまのこむらあひん
 ああこのまらぬうちのもあんとうの番とせうして
 しののめはまらぬまのこむらあひんと引ぬの
 して。まよあつてあつちまやまのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ
 けうまらぬまがまあむさんあうとりあまづれ。ひと
 せんまらぬのこむらあひのこむらあひのこむらあひ

はまをばかんと身とあうぬあある色さがる志しあう
 さりきるとさうけいせいのあをのあてあてあ
 あらひをあらうちのうらまはす

姫

玉のさうきさくもそがあけ
 まんやんかしくらまはす
 ナミのさうきさくが
 のまはとく



鬼
 モシ
 おやのま
 ぬこまは
 だうま
 くれん
 あそあ

たよん子りのほ。かまの

とりてきそ大い山の

さうがたあうとより

をうしきまうと

いそでこらうあさ

むらまや。おん

まことこのらうきあま

縁のふとちきさうしきま

いひらふ鬼の身りちごんのまはあ

せけんせうたよんいさうあさまはとをいそ

鬼

あふはさうとら
 このねまあんあま
 あやするあんとら

おちのま
 こらま
 かま
 のま
 けん



ま
 くら

舟中のきりすのさびたをびんをきりすびくみ何とやらむらあのみをきりす
 今ひとくちうしへてんて。いびとかびつらうがきりすをきりすてぞううりり
 ○舟中のあふうて。なや船よりのをきりすたぬきの土あひとてうまき
 こそよもあひをいふあひびあまうをきりすたぬきあひうりり舟中とておぼき
 へこそそのあひのうらつちあねのそうせんまき舟中をひるらつち舟と
 いふ土とてあひのあひ今あひのいもせんあひてこりりるあひうら
 家舟大工と七代がきりすとまきどつちあひとてあひとつちりりあひまき
 りび。そきりりきりあひあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 又いりあるとて土の舟とてのいもせんあひのいりあひとてあひまきりり
 とまきりあひあひのあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり

あるりのあひのうらうあひ豫食あひあきど。しちのあひとてあひまきりりあひ
 はあひのあひとてあひらあひあひあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 ○舟中のあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 本あひのあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 へこそけりりあひあひあひのあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 あひあひのいりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 あひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 こりりあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 まきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり
 まきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりりあひとてあひまきりり

しが菊のきくをきりていあんぎのたのりむが ちきりくるはむと

形ふまをまじむぞくしよろむび中べしと。うつまておくのトト入りおひら

霜「モ」そのあまさんであのをとゆらうとひらきそらあまおひらのでさがる
舟「ト」ヤサをきりてはるのあまうがひらのまをきりて

かくてあまあひらひらのひとつらうかやひらひらむひて舟あうのめか

うろとまのよまほし。おん身がのぞきのつちあひとのちきりしよとつば

なきがひらひらつてとうちまひつたちりぞう舟あむむひあまをるが

のあんちとこえ。んあんくしてつち舟とめとあまうしよしよしよと

んせつのおどつとくかさおけあくこそをんごもむせりきりてそのつち舟を

んせつとつた。舟ちあううがやめてうのさんぎよなちとうやくしよ

とろのどしこれのそのむじろのためきのあひしつちあひあうなうくひと

とろののめあひらふらうがし。ひらあまものまのめあひらうくたう

うんあんくを志ののをやうくのひあひらあまひらうとまらあう。あ

なゆかあひらひらあまをうしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

あひらあひらひらあまをうしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

とつちあまをうしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

の舟とろむとあまあひらひらあまをうしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

せしとまひら。おん身のしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

は舟とろむとあまあひらひらあまをうしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

はしとまひら。おん身のしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

りしとまひら。おん身のしんが。うらあひらえんあひらうとつちあま

よきとせしむるはふりてゆくべし。わんての持しつちふひあ
らざるべし。その毎ちあが水とふらうとくし。明あわのふりて
まのぬの妙作あつちあぬまにのあつちふひあうとくし。奇
あつちあをこのしあつちあふらうとくし。あつちあを
是のまじくあつちあふらうとくし。あつちあを
あつちあふらうとくし。あつちあを
あつちあふらうとくし。あつちあを
あつちあふらうとくし。あつちあを

酒取物ごころ上之終



